女七歳

岸田國士

彼は彼女を愛してゐるやうに見えた。
彼女は彼を愛しかけた。
彼は彼女を得た。
S子が生れた。
彼は彼女から遠ざかつた。
彼女は待つた。
彼は帰らなかつた。
五度目の春が来た。
彼女の父が死んだ。

——おぢいちやま……おんぶ。

Ｓ子はよく夢を見た。
Ｓ子は彼女に手を曳かれておぢいちやまのお墓なるものに参つた。

彼女の兄が長い長い旅から帰つて来た。
Ｋ伯父ちやまは黙つてＳ子を抱いた。
Ｋ伯父ちやまの眼は怖わかつた。
それでもＳ子は泣かなかつた。

その夏――
Ｓ子はヂフテリヤに罹つた――三度目の注射。

Ｓ子は母ちやまの「おつぱい」を握つて、しづかに「蜂が刺す」のを待つた。

Ｋ伯父ちやまはＳ子より先に泣いてゐた。

恐ろしい或る日のこと――家の壁が崩れ落ちた。

藤棚の下にＳ子のベツトが運び出された。

母はＳ子の脈を取つてゐた。

母ちやまの手は顫へてゐた――林檎が一つ、芝生の上に転がつてゐた。

Ｓ子はひとり笑つてゐた。

去年の秋――

Ｓ子はまた肋膜を患つた。

病院で一と月を過した。

「お人形を忘れて……」

それを病院に持つて行くと、Ｓ子は顔をそむけて泣いた。

――いま連れて来ちや、いや……

そしてまた泣き入つた。

Ｋ伯父ちやまはＳ子の母に云つた。

「気をつけろよ、あいつはヒステリイだぜ」

Ｓ子は男の子を馬鹿にした。
Ｓ子はよく独りで遊んだ。
Ｋ伯父ちやまはＳ子の母に云つた。
「あの子はあれでいゝのかい」

Ｋ伯父ちやまは座敷の寝椅子の上で本を読んでゐた。
Ｓ子がそつと近寄つて来た。
――父ちやまが坊やを連れに来たらどうするの。
Ｋ伯父ちやまは本を伏せた。
――行くのさ。
――母ちやまは。

——母ちやまも一緒に行くのさ。
——ふむ……坊や一人ぢやいやよ。
K伯父ちやまはS子の頭を撫でようとした。
S子はぷいと出て行つた。
縁側で眼を拭いてゐた。

S子は美しい少女になつた。
その眼は、しかし、淋しい怒りを含んでゐた。
S子は、七歳の彼女は——何時の間にか母の悲しみを悲しむ少女になつてゐた。

母はＳ子の為めに毛糸の服を編んだ。
Ｓ子はその側らで人形の服を編んだ。
Ｋ伯父ちやまはぼんやり煙草を喫んでゐた。
日が暮れようとしてゐた。
――明日は……
母は、その先を云はなかつた。
Ｓ子は今年から学校へ行く。
Ｓ子は何もかも知つてゐる。
そのまゝそつと大きくなれ。
彼は彼女を愛してゐないことがわかつた。

彼女は彼に会つた。
彼はＳ子を見て黙つてゐた。
彼は総てを忘れてゐた。
彼は議論をした。
彼女の兄は彼をやり込めた。
Ｓ子は母の膝に縋つてゐた。
時が流れてゐないやうに思へた。
蠅が飛んでゐた。

Ｓ子の眼は淋しい怒りを含んでゐた。
Ｓ子の父は去つた。

Ｓ子は母ちやまの首に抱きついた。

火鉢の炭が跳ねた。

Ｋ伯父ちやまは爪を剪り始めた。

――これ御覧、伯父さんの爪は大きいだらう……。

――まあ、大きいこと、ね、坊や……

Ｓ子は横目でそれを見た。

底本：「岸田國士全集19」岩波書店
1989（平成元）年12月8日発行
底本の親本：「言葉言葉言葉」改造社
1926（大正15）年6月20日発行
初出：「文芸春秋　第三年第四号」
1925（大正14）年4月1日発行
※「文芸春秋」掲載時の題名は「女七歳　――筋だけの小説――」。
入力：tatsuki
校正：Juki
2008年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。